九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

バートランド・ラッセルの教育思想(6)

高田, 熱美
九州大学医療技術短期大学部診療放射線技術学科

https://doi.org/10.15017/185

出版情報：九州大学医療技術短期大学部紀要. 15, pp.87-99, 1988-03-28. 九州大学医療技術短期大学部
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

バートランド・ラッセルの教育思想 (6)

高 田 熱 美*

The Educational Thought of Bertrand Russell (6)

Atsumi Takada

序

「自然は、人間性でさえ、絶対的な与件とはならなくなるであろう。科学的な操作がそうするようになるであろう。科学は、選びさえすれば、れわれの孫たちに闘争よりも調和をもたらす知識、自制、性格を与えることによって善い生活をすることを可能にする。[1]」このように、Bertrand Russell は科学に多大の期待を寄せる。しかも、この叙述は教育に対する科学の意義を示唆している。科学は「知識、自制、性格」をこどもに与えるであろう。それでは、教育において、科学はいかなる意義を有するか。科学は無条件に信じられうるものか。いったい、科学とは何であるか。これらの問いが、ここで検討の俎上にのぼる。

I. 科学の教育的意義

われわれは、「自然力をますます支配することを科学からえている。[2]」科学は技術と提携して文明に貢献し、機械技術連関の社会を築いてきた。この社会を維持発展させるために、社会は自ら科学と技術の学習をこどもたちに要求する。科学技術の修得は現代教育の主要テーマである。これは、高等教育においては、専門職業人を育成するために重要な地位を占めている。

しかしながら、Russell は、こうした社会の要求としての科学技術教育を論究しようとはしない。Russell が探求するのは、「忍耐強く形成されてきた知識の体系[3]」である科学がこどもの人格形成にいかなる意味をもっているかということである。したがって Russell は、科学の教育的意義を文学及び芸術の教育と対比しながら検討する。

教育の観点からいえば、「二つの相反する、一見すれば矛盾する価値が、文学や芸術に対して科学には存在する。」この発言は、文学や芸術及びその教育を否定してはいない。教育における文学、音楽、絵画等の価値を Russell は重視している。[4] つまり、Russell は科学と文学や芸術との優劣を全体的意味をもって決しようとしているのではない。「科学には、最高の精神的卓越性ともいえる心の諸習慣をつくり出す力が、文学、具体的にはギリシア・ラテン文学と少なくとも同じ位いにはある、と私は信じている。[5]」Russell は、教育において科学は文学や芸術とは違った価値を有していると述べているのである。

(1)

まず、教育における科学の価値はその一般性にあるという。すべての児童、学生たちが科学を学び、その活動に参加することができる。科学においては、多少の知的能力さえあれば天才の創造を理解し、それを活用することが可能なのである。たとえば Pythagoras の定理、Pas

* 九州大学医療技術短期大学部一般教育

cal の法則など、天才の創造をこどもたちは天才が行った実験を再現することによって理解し、わがものにすることができるのである。これに対して、文学や芸術はある種の天才によって創造され、その学習については何らかの特殊な能力が要求されるであろう。芸術は、本来、偉大な天才の超越的な能力によって達成される。この能力の根幹は「衝動や心像のある種の新鮮さ及び素朴さ」[6]、いわば「単純性と自発性」[7]である。しかし、現代文明はこのような芸術的創意を破壊する情況にみちており、そのことが教育における芸術や文学の意味を低め、教育を一層困難にしているのである。

Russell はかくして語る。「芸術においては天才がいなければなすに値いすることは何もなされない。科学においてはごく並の能力の持主でさえ最高の業績に貢献することができる。」[8]「科学においては継承者は先行者の肩に乗っかっている」[9]のだ。

もちろん、科学にも天才の業績がある。とりわけ、17世紀は科学における天才の世紀であって、彼らによって科学は飛躍的発展をとげた。それとともに多くの科学者たちが並の能力ではあれ、それを行使してその発展を維持したのである。

こどもたちは、したがって、科学を学ぶことによって知識と理解力を漸次累積し、増大する。これは、こどもたちをして未来への進歩と「誰れでも有用な仕事をすることができる」[10]との希望を抱かせるであろう。科学は、普通のこどもたちにも建設の喜びを与えるのである。「科学の教育によって生み出される態度は、死んだ言語の研究によって生み出された態度よりもっと建設的であろう。」[11]

ややもすると、古典教育、とくにラテン語の教育は、固定した文法規則を教えることによって、こどもたちが誤りをおかすことをおそれ、誤りをさけることのみに集中するといった事態を招きやすい。「これはある種の冷たい正確さを生む。そこでは、独創性は権威に対する尊敬にとって代られる。」[12]「誤りをさけることが主な目標であるときには、つねに知的生気を欠いたタイプを生みがちである。」[13]このような教育は冒険心、心の広さを排除し、積極的にものごとを建設することを不可能にする。これに対して、科学はたえず変化しており、建設心を刺激するとRussell はいうのである。しかも、科学は協同的な建設を進めることができる。「科学という大建築物は現場監督や建築技師や設計者のみならず石工や煉瓦積み職人や一般の労働者をも必要とするのである。」[14]それゆえ、科学教育はすべてのこどもたちの建設心を豊かにするであろう。

Russell は芸術と科学の意義、それらの教育的役割を明らかにすることから離れて、古典教育の問題批評へと向かい始める。彼は語る、「純粋に古典的教育はひとつの固有の欠陥があるように思われる。すなわち、それはあまりにも過去を尊重するということである。」[15]「文学や芸術の学習では注意はつねに過去に釘づけにされている。」[16]と。

芸術の学習は本質的に過去の偉大な作品に注目するであろう。それを学ぶことによって、未来への展望を切り拓くであろう。ところが、それは堕性化しやすい。つまり、芸術の学習は過去に執着し、過去の作品を模倣するだけに終始しがちになるのだ。それは過去の作品への追随ないし盲従となる。「したがって、昔の文学や芸術でずっと教育されてきた人びとは、現代に対してある気むづかしさや不当な意地の悪さを示すようになる。」[17]彼らは現在及び将来への事柄に対してあら探しをする習慣を身につける。しかも、天賦の才をもちあわせていない多数の学習者は創造と称して単なる奇矯に堕することになりやすい。結局、彼らは伝統を無視し、故意に文化を破壊する結果をまねく。

Russell にとって、古典、文学、音楽、絵画等を含んだところの芸術と科学とは、本来、教育においては相補うものであった。ただ、Russell は科学の教育が芸術の教育に比して過小評価されていると見ており、そのため、彼の真意は科学の教育が芸術の教育に劣らぬ意義を有していることを示すことであった。「古典を攻撃することではなく、科学のなおざりれされ

てきた美点に着目することによって、私の議論を展開したいと思う。」[18]この過程で、古典教育の欠陥があえて指適されたというべきであろう。Russell は、人間の教育に関して、科学を芸術から救おうとしたのだ。かつて、Max Weber が学問において科学を価値から救おうとしたように。

思えば、Descartes 以来ともいえるが、科学と芸術とは手をふりほどき、相対しながら遠い彼去へと離れつつある。Russell もまた科学と芸術とを対峙する極としてとらえている。科学は一般的な知に、芸術は特殊な情念に属するのである。科学は未来へ、芸術は過去に向かっているという。この科学という特異なシンボルが、人間の理知に由来するものとすれば、科学の教育は人間の理知的側面に働きかけるものであろうか。そうであれば、そのようにして形成された人間とはいかなるものであるのか。それは真の人間であるといえるか。更に論を進めてみよう。

（2）

Russell は科学教育の第二の価値を述べる。「私が次に述べようとするのは……とくにわれわれが世界観を形成するにあたって科学的な精神の習慣がもつ本質的な価値についてである。」[19] Russell は教育とは世界観を形成することと見ている。「私が意味している教育とは、《教授 (instruction) を方法として一定の精神的習慣ならびに一定の人生観及び世界観を形成すること》と定義できるであろう。」[20]

ではいかなる精神的諸習慣、人生観、世界観を形成するのか。Russell はかく語る。「教育の主要な道徳的目標は欲望に執着することを和らめると同時に、その範囲を拡大することである。」[21]そして、「教育のより純粋に知的な目的はこの道徳的目標と密接に結びついている。」[22]けだし、知的目的を促進することが道徳的目標を達成することになるからである。すなわち、知的目的とは、「われわれが、個人的欲望という歪んだ媒体を通してではなく、できるかぎりあるがままに、客観的態度で世界を見かつ想像すること」[23]であって、これが欲望の執着を和らげるのである。

こう見ると、Russell がいう精神的諸習慣、人生観、世界観といったものは特定の内容を有するのではない。これは、客観的視点に立つということ、いわば世界の関係の方法であった。したがって「教育は社会におけるわれわれの地位について、人間社会全体の非人間的環境に対する関係について、そして、われわれの欲望や関心とは別のあるがままの非人間的世界の性質について真実の見方を与える」[24]ことなのである。科学は教育の内容となって、これを推進する。「私は科学的方法は何かという難かしい作業に取りかかろうとは思わないが、科学的方法が生れてくる精神の気質 (the temper of mind) を指摘しておきたい。この気質が科学教育の二つの価値として先にあげたものの第二なのである。」[25]

科学は教育の知的目的に参与し、その結果道徳的目標にも貢献する。Russell によると、「科学的真理に関するかぎり、人間社会の情念とかあらゆる主観的装置は無意味であること」[26]をわれわれは知っている。「科学的見方の核心は、われわれの欲望、趣味及び利害が世界を理解する鍵になると見ることを拒否することである。」[27]科学は、偏見や先入観あるいは特定の信念をもたずに、素材に従い、それをあるがままに率直に見ることから生れる。科学的精神態度とは知る願望のためにほかのあらゆる願望を一掃すること、希望や恐怖、愛や憎悪そして主観的な感情全体を抑制することを意味する。」[28]要するに、科学的な精神態度とは、素材を率直に見ること (see it frankly)、素材をあるがままに見ること (see it as it is) なのだ。しかし、これもひとつの精神的態度である。この態度は、素材を第三人称として、知的処置の対象として自己と無関係な因果の系として見ることであろう。Russell は、このような方法的態度が人間の欲望を無視し、「非個人的拡大 (impersonal enlargement)」[29]へと促すという。彼は語った。「芸術的創造の主要な動因の一つである建設本能は科学的諸体系の中にいかなる叙事詩よりも広大

な満足を見出すことができる。」[30]「より広やかな生と広汎な関心に対する願望、個人的環境及び人間の生死全体のくりかえしからさえも脱出したいという願望は、他のいかなることよりも科学という非個人的な宇宙観によって満たされつつある。」[31]「科学に奉げられた人生はそれゆえ幸福な人生である。」[32]

（3）

Russell は、「この」世界は心的、「自己中心的特定体」[33]、すなわち自己中心的言語によって表される世界であるという。たとえば、この世界は「ここ」「いま」「私」などよって表され、「これ」によって統括的な定義を得るものである。ところが、科学は「いま」と「ここ」を越えさせる。Russell によると、したがって、「歴史学と地質学はわれわれを『いま』から連れ去り、天文学は『ここ』から連れ去る。」[34]科学は、「ここ」と「いま」という限定された特定の時間空間に在るこれ（身体）を他の時間空間の視点へ無際限に転移することができる。「私が数学や科学について学んだことはきわめて有益であったばかりでなく、冥想と反省の主題を与え、偽りの多い世界における真理の標準を与えるものとして偉大な本質的価値をもっていた。」[35]

Russell が唱える科学はひとつの哲学を内包している。Russell は科学的哲学を標傍しているのだ。彼は自らがその一員であるとする論理分析の哲学が本質とするものは「科学的誠実性」であるという。これは、「われわれの信念を人間にとって可能なかぎり非個人的で、地方的・気質的偏見をとりされるだけとった観察や推論に基礎づけるという習慣である。」[36]

素材を率直に、ありのままに見ること、非個人的な観察や推論によって、「いま」と「ここ」を越えるということは、独自の科学的宇宙観を背景にして成り立つであろう。人間の感情をモデルにして宇宙像をつくりあげるとすれば、それは「すべての場所が自分の家であるかのような居心地のよい感情を与えるであろう。」[37]「われわれは、宇宙を倫理的に中立な言葉で考えることを学んだのち、はじめて哲学における科学的な態度に到達する。」[38] Russell がこう語るとき、中立とは、絵画における遠近法を放棄するように、人間的視座を捨てて宇宙を見ることであろう。そして、このことによって、第三人称の均質な時空から成る宇宙が現われてくるのであろう。これが、さらに、宇宙における人間の相対化を進め、個人的な欲望を克服するのであろう。

しかし、これは、人間の具体的な、生きる問題を相対化し、無化することになりはしないか。たしかに、悲しみに打ちひしがれている者、憎悪の炎で胸をこがしている者などが、もし自己の情念がいかなる原因によって生じているのか。それはいかなる物理化学的変化を起こしているのかを問い、探求するならば、彼は情念を無化して、冷静さを取り戻すことができるであろう。周知のように Freud は、神経ないし心身症の原因をつきとめ、自我と環境との因果の連鎖を明らかにすることによって、その連鎖を断ち切る方法を見出したのであった。われわれは、科学の方法によって自己の情念を分析し、非個人的な情念を育成することができるであろう。科学の方法は、Freud の精神分析を越えた積極的意味を有しているのだ。

けれども、問題は残る。科学的方法は両刃の剣ではないか。すなわち、自他のあらゆる情念を分析し始めるや否や、人は不正に対する怒りや現実の人びとへの生きた愛をも無化するのではないか。とすれば、科学の教育は、その片足をニヒリズムにおいているのではあるまいか。

II．科学のニヒリズム

科学は人間を例外とはしない。科学においては人間も自然の一部である。「人間は自然の一部であって、自然と対比されるものではない。人間の思想と身体の運動は星や原子の運動を記述するのと同じ法則に従っている。」[39]自然は「因果法則によって結びつけられた事件群」[40]、運動、エネルギーについての記号・情報のシステム、いわば「論理的構成」[41]である。

Russell が「素材をあるがままに見ること」

を説いたとき、彼の心底にはこのような論理がひそんでいたのだ。これは、乳幼児が環境をあるがままに見ることとは違っている。乳幼児の場合は、自然のままに素材を見るであろう。そこでは、光と闇、かたち、色などが雑然とこどもの目に入って、ひとつの流れをつくるであろう。ちょうど Hume が自我なるものを流れ来る知覚の束を見なしたように、こどもには外界が漫然と目に映るのであろう。これが本来、素朴な、ありのままに見ることなのだ。もちろん、Russell のそれは、われわれが世界と関係を結び、出会い、あるがままを生きるといったことでもない。かつて Martin Buber は自己と樹木との出会いを語ったことがあった。[42] これは自己と樹木とが相互に浸透し合う対話的関係であった。ここでは、樹木と自己の全体が現れるのであり、したがって、樹木と自己の全体がありのままに見えるのであった。

これに対して、Russell が「ありのままに見る」というとき、そこには科学する意志が含まれている。「観察や推論に基礎づける」という発言はそのことを表している。観察とはたんに見ることではなく、すでに選択を含んでいる。ここでは、何を如何ように見るかが起点となっている。そして、推論はそうした観察に基づいて進められる知的活動のひとつである。そうして、この推論と観察を進める前提ないし信念は、自然あるいは世界が「論理的構成」であるという命題なのであった。しかし、この信念が行き着くところはニヒリズムではあるまいか。ここでは、科学する人間ではなく、科学される人間が登場しているのだ。Russell の論文「自由人の信仰」(1903) における基調は自然科学的世界像における人間の孤独と絶望を表明している。

「人間は、もろもろの原因が成しとげる目的を予見せずに産出したものであること、人間の起源、生成、希望と恐怖、愛と信仰とは原子の偶然な配列の結果にすぎないこと、……すべては太陽系の宏大な死の中で消滅する運命を担わされていること……さて、このようによそよそしい非人間的な世界の中で、人間というかくも無力な生きものはどうすれば生きがいを色あせぬように保ち続けて行くことができるであろうか。」[43]

反転して、Russell は、自然の一部である人間が自然を知りかつ領ることができることを力説する。

「……盲目な自然が、空間の深淵を通って現世を忙しげに回転しているうちに、自然の力になお従いながらも、洞察力と善悪の認識と思考力のない自分の母親の行ないすべてを批判する能力を授けられた子どもを産み落としたことは、ひとつの不可思議な神秘である。……人間は短い人生の間に調べ、批判し、認識し、かつ想像においては創造する自由をもっている。人間のみがその知るかぎりの世界にあってこの自由を有するのである。ここに、その外部生活を支配している抗し難い力に対する人間の優越性がある。」[44]

だが、この古典的な人間賛歌は「どうすることもできぬ絶望」[45]の上でうたわれているのだ。「人間のみが自然を認識できる」との命題は、人間を自然の中へ風化し、やがて、知の主体としての精神をさえ無化する。それゆえ、人間の優越性の証である知は、優越性を否定する知である。科学的知によっては、人間は自然を越えない。それはニヒリズムを招来する。

III. 科学の意味

周知のように、Descartes のコギト (Je pense, donc je suis) は方法的懐疑がたどりついた知の終点であり、物的世界とは別次元の存在であった。すなわち知の主体であるコギトは物的世界を越えており、その干渉を受けるどころか、逆にそれを支配するものであった。もちろん身体もまた自然であり、知の支配を受けたのである。したがって、ここには、身体と自己、自然と精神の対比及び対立が厳存する。

Russell も Descartes の知の系脈に在ったのであろう。彼は自然に対する人間の知の優位を説いたのだ。この知は「いま」と「ここ」という時間空間の制約を越えさせるのである。彼は

語る、「神は時間空間をくまなく公平にながめていると信じられているかもしれないが、物理学もそのようにながめている。したがって、そこには、人間の知覚におけるように、四方をしだいに広がるたそがれに囲まれた、特別に暖かく、親密な、明るいところなど存在しないのである。」[46] と。ここで、時間空間即ち世界をくまなく公平にながめるとは、世界の全体を見るということではない。特定の時空において私が見ている物体の運動は他の時空に位置を占めている物体の運動と同一条件の下では同一であって、それゆえ物理学においては、全宇宙の時間空間における物質の運動をいま、ここにおいて見ることができるというのである。ということは、物理学の時間空間は均質であるということである。時間空間の相対性が確認された後でも、宇宙の時空の均質性は不変である。かくして、私が立つここといまとは普遍かつ絶対の視座となる。

Russell が宇宙を公平に見る (view impartially) というとき、それは宇宙を均質化して見るということであろう。人間の知はそれを推進する。この知は特別のカプセルの中でその安全を保持している。しかし、この知は自らをも自然の中へ切り崩して、無化する。その尖兵たる科学的唯物論は精神もまた自然の運動法則に従うのだとして、理性の防塁を解体し始める。「自然は、人間性でさえ、絶対的な与件とはますますなくなるであろうし、科学的な操作がそうするようになるであろう。」[47] 人間性でさえ操作の対象とするような科学は、換言すれば、科学する人間は、何処に向かって歩むのであろう。それは目標なき虚無ではあるまいか。であれば、教育における科学の意義は瓦解するであろう。Russell は何の謂あって科学の教育を説いたのであろうか。

Russell には科学の歴史をひもといているところがある。これは科学に対するひとつの反省を促すであろう。けだし、歴史とは、何であれ、その根源から現在を照射して、批判の鯉口を切るものであろうから。

Russell は、Burtt の『近代科学の形而上学的基礎』(1924) や Whitehead の『科学と近代世界』(1926) を引照しながら科学の根拠を問うている。Whitehead によると「事物の秩序とりわけ自然の秩序の存在に対する本能的確信が広く行きわたっていなければ、生きた科学はありえない。」[48] この点で、古代ギリシア・ローマに由来する自然法は科学的な精神態度の涵養に不可欠な成分となっていたのである。これに同意した Russell は続いて Burtt を参照する。Burtt はルネサンス期になると「これ以上何ものにも還元できない頑固な事実」に対する関心が広がったという。Burtt によれば、科学は素朴な信念に基礎をおく反合理主義的運動であった。科学は依然として自己の存在を非合理的熱情ないし信仰に負うているのである。

Russell は両者の発言に同意する。すでに Russell は「自然の斉一性についてのわれわれの信念」が幼児期に体験する生活の規律や秩序によって培われるとしていた。[49] 歴史的には、この信念はギリシア・ローマ社会の規律と秩序および自然法に関わるのである。秩序への信念は「科学的発見への衝動」いわば「世界を理解しようとする欲求」を高めると Russell はいう。ということは、明らかに「科学の合理的正当化は理論的に不適当である」[50] ことを示している。

このように、科学は秩序への信念及びこれ以上何ものにも還元できない頑固な事実をデータと見る情念に支えられている。科学は世界を理解しようとするひとつの情熱ないし衝動といった、それ自体を正当化できない非合理的なものに突き動かされるのだ。そこから、世界についての知識の体系が構築される。

18世紀に至っても科学の哲学的基礎づけは行なわれなかった。あの、David Hume は、むしろ科学が非合理的なものであることを暴露した。爾来、科学は哲学的基礎づけを十全に得たためしがなかった。同時代の哲学者たちと同様に、Russell も、科学における認識の問題に言及し、その哲学的基礎づけを行なおうとはしている。ここで彼は要請 (postulate) なるものを導入した。「科学的推理の要請」[51] がそれである。

それは、準永続性、分離可能な因果の線、因果の線のなかでの時間空間連続性、一つの中心のまわりに配列した相似構造の共通の因果的起源、アナロジー、の五つから成る。そして、この要請は経験だけでは証明されない。もちろん、これは要請が真ではないということを証明しない。要請は経験だけでは知りえないということなのだ。Russell はこう語る。たとえば、われわれは経験によって「イヌはほえる」のような一般化へ達する。「ほえているイヌ」を経験することは「イヌはほえる」という一般化への信念をひきおこす (cause) には十分であるが、それだけでは、「イヌはほえる」という命題が真であると信じさせる根拠を与えはしない、と。Russell にとって、この間隙を埋めるのは、人類の長い歴史のなかで形成されてきた推理的習慣なのである。この習慣は「生物が生存するための環境への適応の一部」[52] という。

科学的推理の要請もこのような生物的経験に根ざしている。Russell は、この要請で「経験論者の匂い (flavour) と称してもよい枠をはめることができた」[53] という。とはいえ、この要請は、依然として経験だけによって基礎づけることはできないのだ。「あらゆる人間の知識は、不確実、不精密、部分的である。……この教理に対してわれわれはいかなる制限をも見出してはいない。」[54]

Russell は、科学の記号を生物的経験へ還元しようとしている。科学される人間から科学する人間への逆転回帰が始まる。

Ⅳ. 力の哲学

Russell は晩年に回想する。「失われたものは完全性と究極性と確実性とを見出そうとする希望であった。……しかしながら、以前の信念の放棄は決して全面的ではなかった。あるものは私のもとに残り、今も残っている。」[55] それは、人間が「公平に、いまとここことによって歪められずに宇宙を見ることのできる存在」ではないということ、そして、もうひとつ、「人間は宇宙的にはとるにたりないもの」ではないということである。

Russell は、これを土台にして人間の生きる使命を語る。それは哲学者の使命で象徴されるようなものである。「われわれは、不完全であろうとも、Leibniz のモナドのように世界を映しうると考える。そして、自ら、できるかぎり物を歪めぬ鏡になることが哲学者の義務であると思う。しかしまた、われわれの本性そのもののために避けることのできない歪みを認めることも哲学者の義務である。そういう歪みの中で最も根本的なものは、われわれが世界をここといまの観点から見るのであって、有神論者たちが神に帰するようなひろい公平さで見るのではないということである。そういう公平さに達することはわれわれには不可能であるが、それに向かってある距離を歩むことはできる。この目標への道を明らかに示すことが哲学者の最高の義務である。」[56]

Russell は、ここといまに在って、そのうえ公平さに達する努力をしようというのだ。但し、これは、自然科学における均質な時空の一点を動かしながら、宇宙における視点を無限に得ようというのではない。それは、いまとここという一点の無限移動、したがって無中心化を意味する。無中心化とは、まさにいまとここに生きるということの放棄であろう。

すでに Russell は自然科学を相対化した。ということは、科学を越えた思惟及びその世界を承認することになろう。それゆえ、いまとここに在って、公平さに向かってある距離を歩むというのは、自然科学によって知を拡大、累積して行くということではなく、ひとつの、たえざる歩みを比喩していると見るべきであろう。

それにしても Whitehead が語ったように、Russell は Platon 的対話である。彼の内部には激しい対立が続いているように思われる。彼は語る。

「私は若い時哲学に宗教的な満足を見出そうと期待した。Hegel を捨てた後でさえ、永遠の Platon 的世界が崇める非人間的なあるものを私に与えた。私は崇敬の念をもって数学を考

えた。……人間の外に立っていて、畏敬の情をもつに値すると思われるようなあるものがひきおこす感情に対して、何らかの理由づけを見出そうと私はつねに激しく望んだ。それは星空…科学の示す宇宙の広さ……、とくに数学のような非個人的真理の体系である。人間より偉大なものを何も認めないヒューマニズムで宗教を作ろうとしている人びとは私の感情を満足させない。しかも私は、今知られている世界において人間以外に尊重できるものがあると信じることはできないのである。……星空も人間の知覚に及ぼすその影響も卓越してはいない。その大きさゆえに宇宙を崇めるのは奴隷的で馬鹿げている。非個人的非人間的真理は幻想であるように見える。かくして、私の感情ははげしく逆らうにもかかわらず、私の知性はヒューマニストとともに歩むのである。[57]」

人間と宇宙、人間と真理、これらの乖離は、Russell の心底を交又しながら流れている。これは、はやくも、「自由人の信仰」のなかにも流れていた。ここで、Russell は宇宙におけるストア派の自由を是認しているところがある。そこでは、プロメテウスのような頑固さで空漠たる宇宙の事実を否定することはひとつの束縛であるとされていた。無機的な宇宙に叛逆する激しさには「一種の自己主張」があるからである。これに対して「ストア派の自由には知恵が含まれていて」[58]、これは宇宙における人間の地位を諦観させ、その欲望を越えさせる。それを Russell は、因われない思索、激しい欲望の重荷におしつぶされない思惟、個人的な欲望の超克、及び克己と解した。ストア派の自由は、何ものをも恐れず、不安を抱くこともない不動の勇気であった。

Russell は、このように宇宙の中で人間の生存の意味を問い続けてきた。彼は、宇宙というはかりしれない虚無の一点に閃く、一瞬の火花のように、人間の実存の明滅をもって永遠にふれようというのであろうか。事実、Russell は、その実存を人間への愛に賭けようとする。「私の知性はヒューマニストとともに歩むのである。」この歩みは戦争と平和に関して端的に表われている。彼は第一次大戦の経験について語っている。

「あの戦争のひとつの結果は、抽象の世界に生き続けることがもはや私には不可能になったことである。将軍どもがまぬけであるためにソンムの野でみな殺しにされる運命を担って、若者たちが軍用列車に乗って行くのを私はいつも見た。私はこれらの若者たちに胸痛い同情を覚えた。私は苦痛という不思議な結びつきの中で自らが現実世界に結合させられているのを発見した。観念の抽象的な世界について私が抱いていたすべての大げさな考えは、私をとりまく巨大な苦悩を見れば、影うすいむしろつまらぬものに思われた。非人間的世界は時たまの避難所としては残ったが、とこしえの住みかをきずく国としては消え去った。[59]」

すると、Russell の視界から宇宙は消滅したのか。かつて、Buber は Einstein の天才によって人間のコスモスとしての宇宙は瓦解したと述べたことがある。[60] Russell もそれを確認したのであろうか。もしそうであれば人間は、外的宇宙と同様に、身体としての宇宙をも無化せざるをえないであろう。そして、あとは、Descartes 的な自我が空中を遊泳することになろう。これは絶対的な主体であるが、それゆえ、これは不変で、孤立した抽象なのである。

ところが Russell は、やはり、宇宙を自己の想念の中においている。この宇宙は無化されていない、人間が生きることのできる意味を有しているのであろう。すなわち、Russell は、教育の目的を論ずるにあたって次のようなことを語る。「まず第一に、個人は Leibniz のモナドのように世界を映し出さねばならない[61]」と。さらに Russell は Spinoza にふれる。「Spinoza——自己自身の知恵に従ってひたすら生きてきた最高の賢者のひとり——が人びとに忠告して、『永遠の相下のに』過ぎ往くものを見よ、といったことを、……思い起こすべきである。[62]」「……その永遠の世界との接触は……われわれの現世界がもつ闘争や明らかな失敗によっても完全には破壊されつくしえない強さと根本的な平安

をもたらすのである。Spinoza が神への知的な愛と呼んだものは、この永遠であるものの幸福な冥想である。[63]」

Russell は Leibniz と Spinoza に着目した。想えば、17世紀においては、客観と主観、究極的物質と精神との分岐が不可避的に進行していた。究極的物質の方は自然科学と手を組んで分岐を速めていたし、他方、究極的な精神の方は個人の人格ないし意識の絶対性と結びついていた。いずれが他方を併呑するのか、それとも併存するのか。これが哲学に負わされた課題となっていた。そして、いまもなお、その課題は存続しているのであるが、このような課題を含んだ哲学思想の山系に Descartes はいうまでもなく、Locke, Berkeley, Hume, Kant といった高峰が位置していた。ただし、Whitehead がいみじくも語ったように、「二つの偉大な名前、すなわち Spinoza と Leibniz はこの中にはいない。科学に関して彼らの哲学的影響を見てみると両者共かなり孤立している。Spinoza は古い思考の方法を保持することによって、Leibniz はモナドという新説によって、安全な、哲学の境界外にある辺地へさまよい出たかのようあった。[64]」

Russell が、この二人に深い関心を示したということは、彼もまた自然科学的世界観の外へさまよい出たと言いうるであろう。Russell は宇宙と普遍ないし永遠とを等置したように思われる。宇宙は普遍かつ永遠のシンボルであるのだ。Russell は語る。

「純粋にひとりの哲学者としてみれば、Marx は重大な欠陥をもっている。彼はあまりにも実践的でその時代の諸問題に没頭しすぎていた。彼の視野はこの惑星に限られており、この中でも人間に局限されていた。Copernicus 以来、人間は自ら僭取していた宇宙的重要性をもたないことが明白となっている。この事実に同化できなかった者は、自己の哲学を科学的と称する権利をもたないのである。[65]」さらに Russell は Dewey を批判する。「Deway 博士の世界は人間が想像力を占有しているような世界であるように思われる。天文学の世界は、もちろん存在すると認められてはいるが、それはほとんど無視されている。彼の哲学は Nietzsche の哲学のように個人の力の哲学ではないが、ひとつの力の哲学である。すなわち、そこで価値あると感じられているのは社会の力である。[66]」かくて、Russell はいう。「すべてのことに、私はある重大な危険すなわち宇宙的非敬度 (cosmic impiety) と呼ばれるような危険を感じている。人間の支配力の外に広くある事実に依存するものとしての『真理』の概念は、哲学がこれまで謙譲という必要な要素を教えてきたひとつのやり方であった。[67]」

Russell は、ギリシア人たちが傲慢 (hubris) を恐れ、宇宙に対する不遜な行為と思われることを注意深く避けたのを称えたことがある。彼は、近代人がおちいりがちな力への陶酔、その哲学及びそこからくる宇宙的非敬度を批判して、謙譲の徳を説いたのである。Russell は宇宙へ眼を向けよと言うのだ。何のためにか。人間の力の相対化のために。のみならず人間が真に生きるために。それゆえ、Russell にとって、真理は人間の外に厳存していて探求されるべきものであり、Dewey のようにつくられてゆくものではない。しかも、真理が厳存する世界は敬虔なものである。Russell がこうした宇宙的敬虔を抱いているということは、宇宙がたんる不毛の、論理的構成ではなく生きられる世界であることを意味するであろう。

「(幸福な人間の) 人格は自己自身に対して分裂することもなく、また世界に対して闘いもしない。そのような人間は自らを宇宙の市民と感じ、宇宙が提供する展望と喜びとを自由に享受し、死を考えることによっても煩わされないのである。……最も大きな歓びが見出されるのは、このような生の流れとの深い本性的な和合においてである。[68]」Russell は宇宙との和合を求めている。宇宙における人間の孤独を現実のものとする最大のものは死であろう。死について Russell は次のように語る。「死の恐怖を克服する最も善い方法は……関心を次第に拡大し

て、非個人的にし、少しずつ自我の壁が後退して自己の生命がいよいよ宇宙の生命に融合するようにすることである。」[69] Russell においては、個人的存在は河のごときもので、これは、流れて、大海という宇宙の普遍へと没して行くべきものである。ここには、宇宙と人間との和解がある。このよう孤独の克服、生命ある宇宙との和解こそが Russell の思索を突き動かしてきたパトスであった。

想うに、Russell が語る宇宙は、支配的、分析的知ではなく、受容的、象徴的知によって明らかにされるものであろう。しかし、Russell は、そのような宇宙が何であるかを探求することはなかった。それは語られはしたが明らかにされたわけではなかった。これは言語の限界であるのか。むしろ、このような神秘的宇宙は言語から解放されねばその全容を現わさないのであろうか。

Russell の師にして共同研究者、Whitehead は、近代科学の前提を究明して、17世紀の自然科学がその図式に矛盾をもっていることを指摘した。精神と物質、人間と宇宙との二極分裂は「17世紀の科学的図式に基づく具体者取り違い」[70] に由来するという。かくて、彼はその統合を試みた。超越者の存在を了解するオーガニズムの哲学はその成果であった。しかし、これに対して、Russell はそれを理解しなかったし、評価しようともしなかった。逆に、Whitehead も Russell を理解できなかったのであるが。ただ両者は、いずれも科学的宇宙を問題にし、それをいかにして越えて行くかを希求していた点では同行者であった。

V．科学のパラドックス

Russell は科学を二つの意味で語ってきた。それは功用性いわば技術としての科学 (science as technique) と哲学としての科学 (science as philosophy) である。[71]

科学は、世界を知りかつ支配する人間の力であり、自然や人間性でさえも与件としうるようなものであった。だが、Russell によると力としての科学は一転して宇宙における人間の地位を相対化する。これは技術的力としての人間の科学の相対化である。Russell は科学による相対化を押し進める。

「自然の哲学は不当なほど地上的であってはならない。自然哲学にとって、地球は、銀河系の中の比較的小さな恒星のさらに小さな惑星のひとつにすぎない。このとるにたらぬ惑星に寄生する微妙な生きものを喜ばせるような結果をもたらすために、自然の哲学をゆがめるなどということは滑稽であろう。哲学としての活力説や進化主義はこの点で均衡と論理的妥当のセンスを欠いている。これらは、個人的にわれわれに興味ある人生の現実を地表に限られた意味ではなく、宇宙的な意味をもつものと見なしている。楽観主義も悲観主義も宇宙の哲学としては、同じ素朴な人間中心主義のあらわれである。遠大な世界は、自然の哲学から知るかぎり、善でも悪でもなく、われわれに禍福をもたらすことにも無関心である。」[72] また、Russell は晩年にも同様な感情を吐露している。「kant のように道徳法を星またたける大空と同一の平面におくことは私にはできない。『観念論』と自称する哲学の根底にひそむ、宇宙を人間化しようとする試みは、……私には不愉快である。」[73]

周知のように、17世紀の思惟は物質と精神という観念を産み出した。物質と精神を同等のものと見る二元論がそこから生れ、また、精神を物質の中に置く唯物論的一元論と物質を精神の中に置く唯心論的一元論とが生れ出た。Russell が批判する観念論の哲学は後者に組するであろう。Russell が唱えた「中性一元論」[74] なるものはそのいずれの立場をも拒否するものであった。彼が物質と精神を越えた視座を求めていることはたしかである。彼はそれを宇宙の哲学 (cosmic philosophy) と称したのだ。この哲学は明瞭な方法も構造をも有してはいないのであるが、Russell がここで意図していることは、精神と物質を越えて人間を相対化することであった。これは科学をも相対化するであろう。

技術すなわち自然を支配する力としての科学

が、一転して、人間を宇宙において相対化するものへと変り、自己そのものを越えさせるようにするのは何によってであるか。それは哲学としての科学によってである。もちろん、これは、技術としての科学の発展を阻止するということではない。これを平行して哲学としての科学が不可欠であるというのだ。そうでなければ、科学は人間の力の鼓吹となって、再び人間中心の宇宙を構築する道具に供されるであろう。

哲学としての科学は人間を非個人的にする。それは、私的欲望を普遍的なものに変え、知恵を生む。力としての知識が拡大するところでは知恵は不可欠なのである。ところが、「総合的洞察の意味における知恵は、知識を探求する専門家たちには必ずしも現存してはいない」のだ。

人類の幸福の増大を進歩と称するならば、人類の進歩は技術としての科学の進歩と同等ではない。Russell は、技術的知及び力としての科学の進歩が人類の進歩と無縁であることを示す。つまり、Russell はヨーロッパの科学による歴史の進歩を信じてはいない。それは Russell の『中国の問題』からも知ることができる。彼はこう語る。「西欧文明の顕著な長所は確かに科学的方法である。中国人の顕著な長所は人生の目的を正しく悟る点である。これら二つのものを融合して欲しいと誰も望むにちがいない。」「西欧諸国を支配し、われわれの活動的な衝動を合理化する進歩という理想を中国人は抱いてはいない。……最初、この見解は西欧人にはいかにも怠惰のように思われるが、自分の知恵についての疑問が大きくなるにつれ、西欧人が進歩と呼ぶものの大部分は、いかなる望ましい目標にもわれわれを近づけるわけのものでもなく、絶えざる変化にすぎないことに気がつき出す。」

ここには、技術としての科学への懐疑が浮んでいる。Russell にとって、支配する力としての技術科学が進めば進むほど知恵である哲学としての科学が求められてくるのだ。Russell における科学はこのように分極化しつつ進む。すなわち、人間の支配力とそれ相対化する力へとである。科学のパラドックスというべきか。

む す び

Russell は、科学が力としての科学を相対化して、人間の力の限界を知らせ、それを打ち破り、新たな地平を広げるという。力としての科学は宇宙と人間を均質化し無化する。これを哲学としての科学は克服しようとする。それでは哲学としての科学とは何か。これは本来科学と称されるものの領界を越えている。それは宇宙の哲学、Russell が執着して止まなかった Leibniz や Spinoza の哲学を含んでいる。哲学としての科学に彼らの残照が見えるのである。この意味で、Russell には、Whitehead が試みたようないわゆる科学と哲学との統合はない。Russell において、科学自体が分極する、つまり科学と哲学としての科学へ。そして、Russell は、この分極を踏まえ、哲学としての科学によって自己を非個人的に生き抜くことが人間の教養であると考える。それゆえに、科学は人間を形成する重要な働きをするのであり、自由教育における確たる地位を占めるのである。

注

1) Russell, Why I am Not a Christian, Unwin Books, London, 1967. P.72, lst ed 1927.
2) Russell, Mysticism and Logic, Unwin Books, London, 1963. P.31. lst ed, 1918.
3) Russell, ibid, P.31
4) cf, Russell, On Education. Especially in Early Childhood, Unwin Books, 1973. lst, ed 1926. P.145.
5) Russell Mysticism and Logic, op. cit. P.32.
6) Russell, ibid. P.36.
7) Russell, ibid. P.36
8) Russell, ibid. P.36
9) Russell, ibid. P.36
10) Russell, ibid. P.35
11) Russell, On Education, op. cit, P.78.
12) Russell, ibid. P.78.

13) Russell, ibid. P.78.
14) Russell, Mysticism and Logic, op. cit, P.36.
15) Russell, ibid. P.36.
16) Russell, ibid. P.35.
17) Russell, ibid. P.36.
18) Russell, ibid. P.32.
19) Russell, ibid. P.31.
20) Russell, ibid. P.33.
21) Russell, ibid. P.35.
22) Russell, ibid. P.35.
23) Russell, ibid. P.35.
24) Russell, ibid. P.35.
25) Russell, ibid. P.37.
26) Russell, ibid. P.35.
27) Russell, ibid. P.37.
28) Russell, ibid. P.38.
29) cf. Blackwell, K. The Spinozistic Ethics of Bertrand Russell, Allen & Unwin, 1955. P.18.
30) Russell, Mysticism and Logic, op. cit, P.39
31) Russell, ibid. P.39.
32) Russell, ibid. P.39.
33) Russell, An Inquiry into Meaning and Truth, London, Allen & Unwin, 1966, P.108
34) Russell, Portraits from Memory and Other Essays, Allen & Unwin. 1956. P.166 .
35) Russell, On Education, op. cit P.20
36) Russell, History of Western Philosophy, Allen & Unwin. 1962. P.789, lst ed, 1946.
37) Russell, Mysticism and Logic, op. cit, P.38.
38) Russell ibid P.38
39) Russell, Why I am Not a Christian, op, cit, P.45
40) Russell, Portraits from Memory op. cit, P.152.
41) Russell, My Philosophical Development, Allen & Unwin, 1956. P.139.
42) Buber, M. Begegnung 1960. 「出会い」 児島洋訳. 理想社, 昭和41. P.58.
43) Russell, Mysticism and Logic, op. cit, P.41.
44) Russell, ibid. P.41.
45) Russell, ibid. P.41.
46) Russell, An Inquiry into Meaning and Truth. Allen & Unwin, 1966. P.108.
47) Russell, Why I am Not a Christian, op. cit, P.72.
48) Russell, Sceptical Essays, Allen & Unwin, 1952. P.35. lst ed, 1928
49) Russell, Education and the Social Order, Allen & Unwin. 1951, P.39. lst ed, 1932.
50) Russell, Sceptical Essays, op. cit. P.44
51) Russell, Human Knowledge. George Allen & Unwin, 1948. P.439.
52) Russell, ibid. P.526.
53) Russell, ibid. P.526.
54) Russell, ibid. P.527.
55) Russell, My Philosophical Development, op. cit, P.212.
56) Russell, ibid. P.213.
57) Schilpp, P. A, ed, The Philosophy of Bertrand Russell, Tudor Publishing, Co New York, 1944, PP.19 - 20.
58) Russell, Mysticism and Logic, op. cit, P.43.
59) Russell, My Philosophical Development, op, cit, P.212.
60) Buber, M, Das Problem des Menschen, Werke lBd Kösel-verlag Munchen 1962. P.325.
61) Russell, Education and the Social Order, op. cit, P.10
62) Russell, New Hopes for a Changing World, Allen & Unwin, 1968, P.189. lst ed 1951.

63) Russell, Principles of Social Reconstruction Allen & Unwin, 1916, P.245.
64) Whitehead, A. N, Science and the Modern World, Cambridge 1953, P.177 .
65) Russell,History of Western Philosophy, op. cit, P.753.
66) Russell, ibid. P.781.
67) Russell, ibid. p.781.
68) Russell, The Conquest of Happiness, Unwin Books, London 1961. P.159. lst ed, 1930.
69) Russell, New Hopes for a Changing World, Allen & Unwin 1968. P.210. lst ed, 1951.
70) Whitehead, Science and the Modern World, op. cit,P. 70.
71) Russell, The Impact of Science on Society, Allen & Unwin, 1968. P.89. lst ed, 1952.
72) Russell, Why I am Not a Christian, op, cit, PP.49 - 50.
73) Russell, My Philosophical Development, op, cit, P.131.
74) Russell, My Philosophical Development, op, cit, P.139.
75) Russell, Portraits from Memory and Other Essays, op, cit, P.161.
76) Russell, The Problem of China, 1922. 中国の問題，牧野力訳，理想社，昭和46, PP.217 - 220.